

# 文体論研究

第44号

1998年3月

## 論文

- Color Expressions in *Lazamon's Brut*.....吉村 耕治 ..... 1
- Beowulf* に於ける *Prosopopoeia* について  
 ——*Wapen* を中心に—— .....長谷川 寛.....12
- <語り>としての漫画の構造  
 ——<笑い>の意味するもの——.....古岩井 嘉蓉子.....34
- 段落構造の把握と国語教育への応用  
 ——「天声人語」を題材として—— .....立川 和美.....38
- カール・ビューラーの『言語理論』とレトリック.....山取 清.....51
- 「マンフレッド」の受容と変容  
 ——バイロン、ハイネ、鷗外を中心に——.....原田 範行.....64

## 書評

- 大浜 博.....76
- 
- 文体論関係書新刊紹介 (1997) .....82
- 会員著書一覧 (1997) .....83
- 海外学会報告.....85
- その他.....90

## 海外学会報告

### 「第2回国際文学意味論学会」(Second International Conference of the International Association of Literary Semantics (IALSII)) に参加して

菊池 繁夫

上記学会は、昨年(1997年)9月1日(月)から9月4日(木)まで、ドイツの University of Freiburg で開かれたものである。今回の organizer は同大学 English Department の Prof. Dr. Monika Fludernik である。本学会は4年に1度開かれており、第1回大会は1992年にイギリスの University of Kent at Canterbury で開かれた。学会誌である *Journal of Literary Semantics: An International Review (J.L.S.)* は年3回 Julius Groos Verlag から発行されており、1972年の第1号から数えて1997年で25年目となる。編集は、同学会の事務局のある UKC で Trevor Eaton の手によって行われている。

今回は、6つの plenary lectures, 1つの workshop, 125の研究発表が行われた(プログラム上の数)。plenary lectures は、(1) Mark Turner, 'A mechanism of creativity'; (2) Leonard Orr, 'Figurative and thematic isotopy and the problem of narrative transtextuality'; (3) Marie-Laure Ryan, 'The text as world versus the text as game: On the theoretical implications of possible worlds semantics for literary studies'; (4) Pier Marco Bertinetto, 'On the stylistic use of verbal tenses in literary prose. Examples from modern Italian novels'; (5) Roland Posner, 'Performances and transcripts: Towards a theory of the media';

(6) Michael Toolan, “‘Character speech’: The new, compensatory spokenness within literature’ である。これを見ても分かる通り、認知論、イソトピー論、ゲーム理論、文体論、記号論、談話分析等と、literary semantics というものが1つの単体としての理論ではなく、いくつかの理論ないしは概念の集まりであることが分かる。研究発表もこの状況を反映して、かなりの理論的広がりを見せた。また、IALSII では、Freiburg がドイツの南に位置しているという地理的条件もあって、ドイツはもちろんハンガリー、チェコ、ウクライナ、ロシア等東欧からの参加者が多く、これに旧西欧諸国と米国を加えて、大変国際色豊かなものであった。なかには、ハンガリーの Budapest から航空運賃より割安という理由で、車で途中一泊して来たという発表者もあった。このように、旧東欧の厳しい経済情勢を押しての意欲的参加者が多数あり、大会を盛り上げた。ちなみに、この IALSII と同じく昨年(1997年)の7月1日から5日まで英国の Nottingham Trent University で開かれた、Poetics and Linguistics Association (PALA) の第17回年次大会と比較してみるとその地理的広がりが見える。こちらは英国の文体論の学会であるが、開催地が Nottingham というのもあって、英国色が濃く出ていた。

大会前日の8月31日は、Martinsbräu という大麥ビールとソーセージのおいしい pub で registration が行われ、翌日からの盛会を期待させた。第1日目は Mark Turner の上記の lecture から始まった。彼は、conceptual integration (以下 ci) である ‘blending’ を、既存の意味から新しい意味を創造する際の基本的な認知操作とし、その ci のメカニズム、ci の結果生ずる新しい conceptual blends の例 (*houseboat, computer virus, military democracy, artificial life, bond ghoul, same-sex marriage* など)、そしてその文学的使用について論じた。この ci では、従来の、もとの構造を保持した形での、2項間 mapping ではなく、2つの input mental spaces が1つの blended mental space において統合され、新しい構造を生み出すとされる。この理論は、Gilles Fauconnier との共同作業から生まれたものである。cognitive な面は、上記 PALA17 でも強調され、Nottingham の R. Carter

が ‘PAST 20 years: sociolinguistically-driven (discourse grammar) vs PRESENT: psychologically-driven (poetics of mind)’ という図式を示し、文体論研究での cognitive な視点の重要性を指摘したことから分かる通り、この方面での研究動向は見逃せない。

session は、毎日、朝昼夕方と3つ開かれ、各 session は A, B, C, の3つ、ないしはDを含めて4つの教室で行われた。そのいくつかについて、概要並びに雰囲気をお伝えしたい。この第1日目には、上記 M. Turner の lecture の後、Slot 1 で、Vimala Herman が ‘Deictic projections and conceptual blending in epistolarity’ と題する発表を行い ‘imaginative deictic projections’ の現象を cognitive の観点から説明した。そして、それに対して M. Turner が respondent としてコメントを加え ‘epistolary dialogue’ という概念を示した。また、Ingrid Piller が ‘Extended metaphor in automobile fan magazines’ で、metaphor は一般の消費者が専門的な車の機能を理解しやすくするとした。

2日目は、Session Slot 5 の A 教室が興味深かった。Elena Semino, Martin Wynne & Mick Short の Lancaster グループは ‘A corpus approach to the study of speech and thought presentation: the notion of faithfulness revisited’ と題する、corpus-based な分析を示した。3人は Fiction, Press, Biography の3種について、更にそれを Serious と Popular に分けた、計6種のカテゴリーについて、頻度調査をもとに、Direct/Free Direct の点から、Speech, Writing, Thought に関して分析を行った。ちなみにこの corpus は現代英語 240,000 語の語数を誇る。Slot 6 では、Bo Pettersson が ‘Thematics today: A theoretical survey’ の中で thematics の変遷を論じた。まず theme を、unity を重んずる structuralism, discontinuity を重視する post-structuralism, 社会との関わりの点から見る ideology, そして現在の communicative act と見る視点を論じ、将来の thematics は aesthetics や pragmatics との関わりにおいて見るべきとの見解を示した。同 session では、他に Will van Peer, ‘Where do themes come from?’, Max Louwerse, ‘Computers and thematics:’

Where to start?’があった。Slot 7 では H. P. Dannenberg の chair のもとに Narratology の発表が行われ、R. Schneider, ‘A cognitive approach to literary character’, Robert Baah, ‘Unreliable narrators and artistic excellence’ では literary text における participants が論じられ、Tatyana Yakhontova, ‘Evaluations in literary texts and genres’ では lexis における選択は author の個人的文体ではなく、text の一般的特徴によるとされ、adventure novels からの例が示された。この夜には Conference Concert が行われたが、私は翌日の発表を控え参加できなかった。その中の1曲 Schubert の ‘Der Tod und das Mädchen’ が、Diana 妃の訃報と重なったと、参加された豊田昌倫氏が述べられた。

第3日目は、午後の Schwarzwald への学会主催のバス旅行の後、夜に Roland Posner (Technische Universität Berlin) の plenary lecture が上記のタイトルのもと行われた。PALA の代表でもある Tony Bex (U. of Kent at Canterbury) の司会で、20時15分より行われたにもかかわらず、多くの聴衆を集めた。内容は、medium を communication elements の8番目の要素とし、performances と transcripts の観点から様々な medium を論じたものである。例えば、medium type 1 は literary text とか painting が入り transcript-oriented である。それに対し、medium type 2 は European art music などでは performances based on transcripts を特徴とする。medium type 3 は ballet, theater, opera などでは、これは ‘performances which are transcribed only partly’ と見る。

4日目は、Slot 10 では、G. M. Hall が ‘So what? Evaluating narrative in classic English romantic poetry’ で、Labov (1972) の socio-linguistic functional model of narrative をいくつかの ‘canonical English Romantic texts’ に応用して見せた。

なお日本からの発表者は次の通りであった。Masako Hiraga (平賀正子) (放送大学), ‘Historicity of metaphor: Blending and an interpretation of haiku’; Kayoko Koiwai (古岩井嘉蓉子) (神奈川大学), ‘Japanese concepts and English translations’; Haruhiko Yamaguchi (山口治彦) (神

戸市外大), 'Context and speech representation: Towards a unified perspective on the metalinguistic use of language'; Yukio Hirose (廣瀬幸生) (筑波大学), 'Direct and indirect speech as seen from levels of linguistic expression: A contrastive analysis of Japanese and English'; Shigeo Kikuchi (菊池繁夫) (大阪国際女子大学), 'The importance of being intermediary: Classical structuralism and literary analysis'; Denis Jonnes (九州大学), 'Family systems theory and the narrative field'; Masanori Toyota (豊田昌倫) (京都大学), 'Repetition in literary discourse: A case study'; Tomoko Tsujimoto (辻本智子) (大阪工業大学), 'Discourse deixis and its implications for literary discourse'.

この最後の日には Hotel Colombi で Conference Banquet が行われ, Professor Fludernik が名司会ぶりを示し, またその人柄から和やかな dinner となった。またこの席で, 彼女が IALS の代表となることが発表された。この IALS の次回の大会は4年後になるが, 上記 PALA18 が今年(1998年)4月16-18日にスイスの Berne で開かれる。大会テーマは 'New Pasts, Old Futures'。問い合わせは Prof. Richard Watts (U. of Berne; Tel: ++41 31 631 82 45; Fax: ++41 31 631 36 36; E-mail: watts@ens.unibe.ch)。その他, 英国の University of Nottingham で, 国際会議が 'Speech, Writing and Context: Literary and Linguistic Perspectives' のタイトルで, 同大学の Rebecca Hughes らが中心となって, 7月16-19日の間開かれる。guest speakers としては Wallace Chafe や Deborah Tannen が予定されている。連絡は Rebecca Hughes (U. of Nottingham; Fax: ++44 115 951 4992; E-mail: Rebecca.Hughes@nottingham.ac.uk) まで。これと1日重なる形で, フランスの Reims で 6th International Pragmatics Conference が7月19-24日の間開かれる。連絡は IPrA Secretariat (Antwerp; Tel/Fax: ++32 3 230 55 74; E-mail: ipra@uia.ua.ac.be) まで。文体論及び関連分野での国際学会からは, しばらく目が離せない。

# STUDIES IN STYLISTICS

No. 44

March 1998

## Articles

- Color Expressions in Laʒamon's *Brut* .....Koji YOSHIMURA..... 1
- On Prosopopoeia in *Beowulf*  
—Focusing on *Wapen*— .....Hiroshi HASEGAWA..... 12
- The Structure of Japanese Four-frame  
Comic Strips as a Narrative .....Kayoko KOIWAI..... 24
- The Understanding of Paragraph  
Arrangement and Application for  
Teaching Japanese .....Kazumi TACHIKAWA..... 38
- Karl Böhlers *Sprachtheorie* und die Rhetorik  
..... Kiyoshi YAMADORI..... 51
- Translation as Creative Treachery:  
A Comparative Study of Byron's *Manfred*  
and Its Translations by Heine and Ogai  
..... Noriyuki HARADA.....64

---

## Book Reviews

- Hiroshi Ohama..... 76
-